

悠久の河

9

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

大洪水

避難所は、どこも戦場のようだった。子ども等の泣き叫ぶ声、大切な家を守りたいため制止を振り切って、暴風雨の中へ飛び出す者、一心不乱にお経を唱える老人たち。

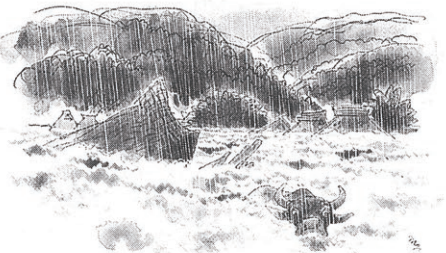
世話役は、人々を宥めるのに苦勞していた。「どうぞ落ち着いてごしなさい!。この度の嵐は、これまでの洪水と違うので、決して、無茶なことはしないでごしなさい!」

「家のことが気になるのは皆同じだ。だが、命を失うてしもうては、なんにもならん。大庄屋の周藤の旦那も剣神社から村を見ながら、今後のことを考えて下さっておるでなあ」

その時、避難所の外で悲鳴とも叫びともつかぬ声が上がった。避難所に水の様子を知らせるために山道を歩いていった彌七の声だった。

「堤防が切れたぞ!」
彌七の叫び声に、人々は先を競って避難所から村の見える山道へと走った。

褐色に濁った水が渦を巻き、まるで地の底のあちらこちらから水が湧いて出るように盛り上がり、次から次へと濁流は村に押し寄せ、村を呑み込んだ。上流の村々でも洪水に襲われたのだろう、藁葺の屋根が浮いたり沈んだりしながら流されて行き、小屋ごと流されたような牛や馬の屍までもが濁流に吞まれ、勢いをつけて、流されて行った。



画 高田勲

洪水に慣らされている日吉村の人々にとって、この度の洪水は生まれて初めて見る凄まじい光景だった。

「おらの家が流されてしもうた」

「おらの家もだ」

「おっ父が、おらん。おっ父」

叫び声は悲鳴に変わり、やがて泣き声に変わった。

夜の帳に包まれて、暗闇の中で、村人たちは、地獄から聞こえてくるような水と風の音を聞きながら、眠れぬ夜を過ごした。

昨日の出来事が、まるで夢のようだった。

台風が去った後の空の青さは、また格別だった。雲一つ無い青空に真夏の太陽が輝き、じりじりと大地を焦がしそうに照り続けた。

けれども、日吉村は依然として泥水の中だった。水の出る時の勢いは速く、引く時の水の勢いは、信じられないほど、遅かった。さらに、水の引いた後の悲惨さは、目を覆うばかりだった。

流失した家や家財、決壊した堤防、田んぼを埋め尽くす土砂と塵。

つい二、三日前まで、この場所では村の人々が生活していたとは到底信じ難い光景が、そこに有った。